

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成26年6月16日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2011～2013
課題番号：23401033
研究課題名（和文） アラビア海沿岸先史海洋民族文化の基礎的研究
研究課題名（英文） Basic researches about the prehistoric marine ethnology in the coastal area of Arabian Sea
研究代表 津村 宏臣（TSUMURA, Hiroomi） 同志社大学・文化情報学部・准教授 研究者番号：40376934
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）9,800,000円、（間接経費）2,940,000円

研究成果の概要（和文）：先史・古代から継続されるアラビア海沿岸域における海洋民族史に焦点を当て研究を遂行した。オマーン・インド・モルジブを中心に、現地踏査と調査を実施した。結果として、①先土器とも呼べる貝塚文化を形成したオマーン東沿岸域の実態、②イスラーム交易の多様性（内陸部と海洋部）、③マリーン・イスラームと定義できる海洋交易民の解明などを実施した。なお、調査過程において④広域文化遺産踏査情報集積のシステム化と、⑤踏査などの短期間海外調査対応の測量方法の特許申請を実施した。

研究成果の概要（英文）：The research, which focused on the marine ethnology of a people who are continued from the prehistoric and ancient in the Arabian Sea coastal areas, was carried. The survey and investigation was conducted in Oman, India and Maldives. The following has been revealed as their result. 1-Actual conditions of Oman east coastal areas that formed the shell mound culture to be able to call pre-pottery culture. 2-Diversity of Islamic trade. 3-The elucidation of marine trade people that can be defined as a Marine Islam. 4-System construction of wide-area cultural heritage survey information integrated. 5-Development of a simple survey system. In particular about the above 4 and 5, they are currently patent pending.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：GIS・イスラーム文化・先史学・文化人類学・文化遺産情報・時空間情報システム・海洋民族学・考古学

1. 研究開始当初の背景

従来、エジプト・メソポタミア・インダスなど西アジア・南アジア文明域では、膨大な考古学調査や研究が実施され、先史古代の実態の解明が進められてきた。反面、これら文明の周縁域（特に海洋沿岸域）では、政局や産業/観光開発などによる現地調査の困難さや、それらを遠因とした研究主題の設定の難しさから、体系的・網羅的な考古学調査・研究の対象になりにくい状況があった。各文明の中心域でみられる“周縁域の物質文化”の文化的コンテクストを周縁の調査データから把握することは、中心域の理解をさらに深めるだけでなく、不明瞭な周縁域の実態を理解する上で重要で、同時に文明の中心-周縁という史的システムに根ざした議論を可能とする。

周縁域での研究については、メソポタミアやインダスとの交易が盛んに行われたマガン（オマーン）の実態把握が重要視されてきた。これまでオマーンでの先史古代文化研究は、S, Cleuziou や T, Maurizio らの仏伊合同調査（Ra's al-Hamra Project[75-86] Joint Hadd Project[85-08]）によって推進され、おおよそ BC2000 年期以降のオマーン先史古代の実態の概要が把握できつつある。2003 年、申請者と T, Maurizio および C, Maurizio とともにボローニャ大学人類学講座は、オマーン先史文化に関する共同研究プロジェクトを立ち上げ、2005 年からオマーンにおける先史古代文化に関する現地調査と資料情報集積を開始した。仏伊合同調査プロジェクトおよびこれまでの伊日共同研究プロジェクトは主眼がメソポタミアやインダ

スとの交易関係史に置かれたため、次の研究主題が未明である。

- ①マガンとしての交易の担持者であるオマーン先史人のBC2000年期以前の実態
- ②交易品の加工場・港湾集落以外の“資源採掘場”や“生活址”などのBC2000年期以降の一般的なオマーン先史人の実態
- ③オマーン湾やアラビア海沿岸に存在する貝塚文化の人類生態史特に海洋資源獲得と物流の実態
- ④内陸域におけるオマーン先史古代人の実態

本課題の目的は、まず上記未明の主題を明らかにすることを目的とし、あわせて②③の議論の基礎となるモルディブ/イエメン/インドの環アラビア海沿岸に点在する貝塚文化の実態把握を目指す。最終的には、これら周縁域の海洋民族の文化の独自性を明らかにし、中央-周縁のシステム内での交易担持者への変容や衰退について議論することを目的としている。

2. 研究の目的

本研究では、西アジア・南アジアの文明の周縁域に焦点を当て、①この周縁域における先史古代の民族の実態解明のため、②オマーン/モルディブ/イエメン/インドの環アラビア海沿岸先史海洋民族遺跡に焦点を当て、③貝塚や港湾遺跡を中心とした一般調査/発掘調査および情報基盤構築を実施し、④古海洋環境ならびに古生態系も含めた人類文化生態の総合的分析から先史海洋民族文化の独自性について評価し、⑤文明の中心-周縁という史的システム論の議論の中で、当該地域の海洋民族文化の理解を深めることを目的とする。

3. 研究の方法

目的の①②の解明のため、ラス・ジプス貝塚については、オマーン遺産文化省考古博物館局と協力して進めたこれまでの表面調査と地中探査から、下記の事実が明らかとなっている。

- A. 貝塚は地点毎に4時期(第1地点:B。C。5800年前、第2地点:B。C。1500年前、第3地点:B。C。3500年前?、第4地点:B。C。1000年前?)が想定でき、第1地点は、アラビア海西岸域最古の貝塚の可能性はある。
- B. 各時期において周辺環境が激変しており、貝塚での資源利用も内湾生態系資源から外洋生態系資源に変化している(第1~第2地点形成までの期間にラグーンが離水)。
- C. 第1・3地点の採集石器資料は、中石器時代の細石器の特徴を備えており(アラビア半島では希な事例)、漁撈具は少なく、

多くは細石刃、小型剥片尖頭器など狩猟具である(細石核は船底状・角柱状を呈す)。

- D. 住居址など明確な居住痕跡が認められず、季節移動による資源利用の蓋然性が高い。

本課題では、第1・3地点の面的な発掘調査を行い、Aについては、より詳細な年代測定資料を採取して年代を確定し、同時にBを明らかにするために貝層のサンプリングと定量評価を実施する。Cの石器資料の多くは現在表面採集資料がほとんどであるため、資料出土状況と合わせた石器群構造を評価する。Dの住居址は広域の地中探査を実施することで、ラス・ジプスにおける先史時代人の生活様態を復原する。こうした復原により、最古の海洋民族文化の姿を明らかにすると同時に、周辺海域沿岸におけるその他の貝塚・集落遺跡との比較検討の起点となる資料情報を提供できると考える。

また、③④について、ラス・ジプス貝塚の発掘調査と並行し、現在進めているオマーン国内での一般調査範囲を拡充する。特に、近年観光開発によって多くの貝塚が発見/破壊されているスハールやムサンダム地域、海洋環境資源が豊富なサララを中心に範囲を拡大し、悉皆的な貝塚・集落遺跡分布データを構築することで②や③の未明の問題の解明を目指す。また、この一般調査では現在まで明らかになっていない、内陸域の交易資源分布についても体系的に調査することを目的とする。これらにより、従来曖昧に表現されてきた“マガンの”銅鉱石や紅玉髓などの産状を明確にし、内陸と海岸との資源流通の実態について明らかにできると考える。

④⑤について、本課題は、文明の中心域との関連という視点だけでなく、それらを担った人々の海洋民族文化の独自性を明らかにすることが目的である。そのため、沿岸海流・季節風の調査を実施し、オマーンだけでなくモルディブ/イエメン/インド西岸における貝塚分布の基礎情報の蓄積を目指す。申請者は2008年以降、これらの地域において予備的な現地踏査を実施しており、本課題では各地域でのパートナーシップの確立と、それを機軸とした遺跡情報収集を行う。あわせて、研究協力者と共に現地に入り、環境・生態系評価と復原のための試料採取を実施し、海洋民族文化相互の比較・検討資料とすることを目指す。

4. 研究成果

オマーン沿岸東海岸における先土器貝塚文化の解明については、ラス・ジプス貝塚における測量、および地中探査を実施し、イスラム期(6世紀)以前の貝塚文化の存在を明らかにした。特に、無土器新石器時代とも呼べる、細石器文化が沿岸域に広域に広がって

おり、ラグーン周辺環境を利用しながら、沿岸漁労を営みながら生活する人々の姿を描き出した。特に、広域に及ぶ海洋交易の痕跡は認められず、資源集約的労働編成の中で独立的な生業を営む文化が存在したことを明らかにした。従来インダス文明との関連で語られてきたオマーン東沿岸においては、インダス側には存在しない明瞭な”海洋民”の姿があることがわかった。

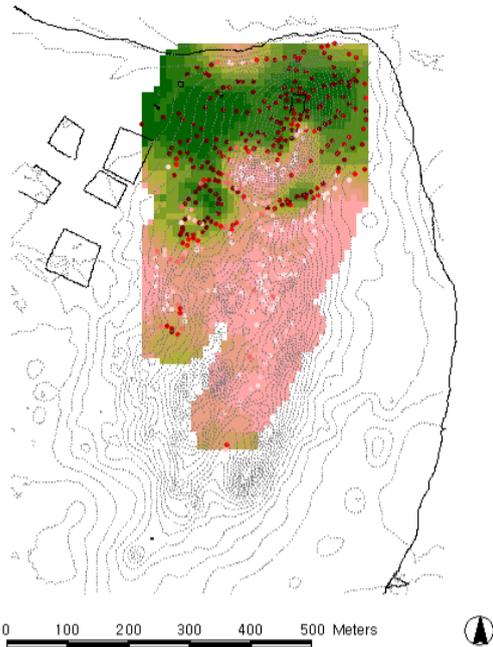


図1 ラス・ジプス貝塚分布

インダスやメソポタミアとの関連で言えば、オマーン北沿岸域には、細石刃や小型剥片尖頭器技術が広がっており、広義には湾岸エリアにおける無土器新石器文化の系譜が看取できる。しかしながら、在地の小チャート塊などを駆使しながら独自の細石器石器製作技術を展開しており、同時に動物利用から海洋資源利用（貝塚形成）へと生業を転換している点がメソポタミアや湾岸域とは大きく異なる海洋民族文化のあり方といえる。また、インダスとの関連で言えば、本研究でも踏査と情報収集を実施したインド西岸、インダス下流域においては、貝塚文化が形成されていない現状が確認できており、こうした点から生業的、社会的にもインダスとも独立した海洋民族文化が発達した可能性を示唆している。

6世紀以降の東沿岸の様相については、大規模港湾都市であるスールの民族調査ならびに都市構造調査などを実施した。6世紀以降、本格的にイスラーム交易を開始したオマーンにおいて、スールや対岸のアイガ、最東北沿岸のラス・アル・ハッドなどの各都市、集落の構造は、一般的なイスラーム都市構造

と大きく異なっていることを明らかにした。特に、上記3都市においては、現地社会調査を実施し、ハーラと呼ばれる居住区域が血族関係だけでなく、移民を中心とした複数の民族の共存形態を形成している（た）こと、その都市構造の特徴が、アラブイスラームやトルコイスラーム、ペルシャイスラームといった主要なイスラーム都市形成とは異なり、異民族を居住させるための空間を形成し、モスクやマドラサなどが都市の中心とならないこと、そうした都市形成がインダスやエジプトといった文明域だけでなく東アフリカやインド洋交易などとの関連で形成されてきたこと、などを明らかにした。



図2 スールのハーラ（氏族居住）

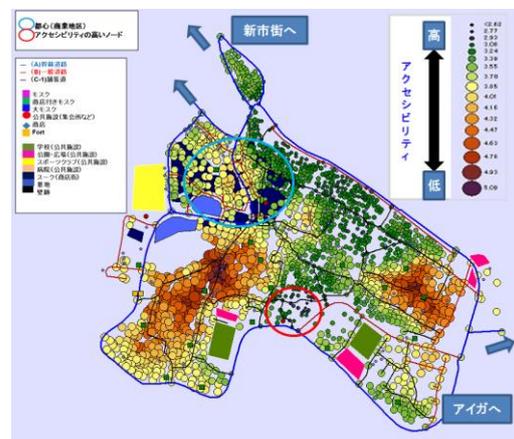


図3 スールの都市構造分析

この都市形成の主体となるいくつかの民族形成史の中で、内陸交易との関連性を強く想定させる複数の民族が内陸への陸路交易を担った歴史的過程を調査した。特に内陸ニズワにおけるフォート分布を現地調査し、その可視域分析や行動圏分析、などを実施する中で、海洋沿岸域には成立しなかった交易集約的な社会、権力構造の存在を想定した。特にニズワにおいて巨大な都市や水道が整備

される背景には、交易集権的な氏族連携と都市形成が関わっており、それが湾岸域にも散見されるような墳墓形成に結びつくことを明らかにした。従来こうした権力構造の発生の背景は不詳であったが、内陸と沿岸域の環境や生態、経済的行動の相違などを明らかにした点は大きい成果である。

また、オマーンにおけるこうした成果は、対岸のインド、あるいはアラビア海を挟んだモルジブにおける遺跡形成や文化景観と密接に関わることも明らかとなった。

モルジブにおいては、6世紀以降、特にスールやアイガがマリーニスラームとしてアラビア海を文化資源化した時点で、特にモルジブ南環礁域において（ラーム環礁）仏教圏の影響からイスラームへと変化している。こうした南環礁域という海洋民を中心とした寄港地においては、小規模なインドとの沿岸交易を超えた、環アラビア海イスラーム交易（マリーニスラーム）の存在が大きく影響していることを調査から明らかにした。

また、インド西岸（インダス）においては、大規模な貝塚文化を形成しない状況がある中で、グジャラート州においてインダス文明とは明らかに性質の異なる墳墓形成の文化が見られ始めることを明らかにした。現状ではオマーンにおけるいくつかの墳墓との関連が想定され、内陸で形成された集権的な都市との関連を伺わせる。従来のマガンとよばれるオマーン文化は、沿岸・内陸の生態環境の2極相のなかで、異なった役割をそれぞれ果たしていた可能性が高く、インダスとの関連では、特に内陸中心氏族が強く関わっていた可能性が指摘できた。

こうしたマリーニスラームと内陸域の氏族における集権的社会のあり方の比較研究を進めるため、同様に海洋に面したイスラームであるエジプトならびにインダスのより内陸にあるペルシャイスラーム域（中央アジア）において、比較研究のための情報集積や調査なども実施した。これらを実施するため、踏査における情報を集積する手法としてのGISの利用と、LRFを用いた官位測量システムを開発し、その特許出願も実施した。

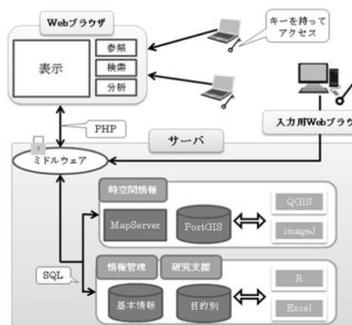


図4 出願したSTIS（遺跡情報集積システム）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計7件）

①津村宏臣、多様な世界で生きる Cross-Culturalist をめざして、同志社時報、査読無、No.133、2012、pp.48-49

②津村宏臣、ナイルデルタの村落立地・分布のGISを用いた定量分析と評価、ナイル・デルタの環境と文明Ⅰ（長谷部史彦編）、早稲田大学イスラーム地域研究機構、査読有、2012、pp.116-127

③津村宏臣、定量評価によるナイル・デルタエリアの住環境アセスメントと時代性の理解—自然灌漑から人口灌漑への変化と居住エリア拡大の諸相—、ナイル・デルタの環境と文明Ⅱ（長谷部史彦編）、早稲田大学イスラーム地域研究機構、査読有、2013、pp.99-115

④津村宏臣、先史文化の空間認識、季刊考古学、第122号、査読無、2013、pp.44-48

⑤津村宏臣、空間情報科学・サービスとしての遺跡調査と情報統合—ドキュメンテーションとローカルナレッジベース、考古学研究、査読有、第60巻第3号、2013、pp.28-43

⑥Hiroshi KATO, Hiroomi TSUMURA, Erina IWASAKI, GIS as a Tool for researching the socioeconomic history of modern Egypt, Journal of Asia Network for GIS-Based Historical Studies,1, 査読有、2013、pp.22-32

⑦Hiroomi TSUMURA, Keisuke FUKUHARA, Haruna OBA, Spatiotemporal quantitative approach for understanding Islam urban structure, Sur. Journal of Asia Network for GIS-Based Historical Studies,2, 査読有、2013、

〔学会発表〕（計6件）

①福原啓介、岸田徹、津村宏臣、埋蔵文化財探査におけるジャイロセンサーを用いたグラジオメーターデータの標準化と評価—多軸グラジオメーター構築のための計測・評価実験—、日本文化財科学会第29回大会、京都大学、2012.6

②高田祐一、田代亜紀子、津村宏臣、文化遺産情報資源共有化に向けた大規模データベースの開発、日本文化財科学会第29回大会、京都大学、2012.6

③竹内俊貴、佐藤哲、高田祐一、津村宏臣、WebGISを基盤とした文化財情報共有化のためのアプリケーション開発—一般ユーザーを対象としたグループウェア—、日本文化財科学会第29回大会、京都大学、2012.6

④宇佐美智之、津村宏臣、大場春那、非等方性累積可視域分析を応用したオマーン・ニズワ都市の文化的景観—文化的景観をめぐる定量評価手法の展開—、日本文化財科学会第29回大会、京都大学、2012.6

⑤津村宏臣、文化遺産の動的データベースの設計と実装、日本文化財科学会第30回大会、弘前大学、2013.7

⑥津村宏臣、渡邊俊祐、ウズベキスタン・カンカ遺跡の詳細測量調査と微地形評価ーユネスコ・ドキュメンテーションプログラムー、日本文化財科学会第30回大会、弘前大学、2013.7

〔図書〕(計2件)

① 津村宏臣・田代亜希子、文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力情報資源共有化に関する報告書、2012、39

② H. Tsumura and S. Watanabe, UNESCO Tashkent, Report of The Theoretical and Practical Seminar on Documentation Standards in Tashkent. 33

〔産業財産権〕

○出願状況(計2件)

名称：文化財データのアーカイブ方法、アーカイブシステムおよび情報管理サーバ
発明者：津村宏臣・高田祐一・竹内俊貴
権利者：同上
種類：特許
番号：特願2012-248079
出願年月日：平成24年11月12日
国内外の別：国内

名称：地形データの作成方法・データロガーおよび測量システム
発明者：津村宏臣・杉本裕二・渡邊俊祐・高田祐一・竹内俊貴
権利者：同上
種類：特許
番号：特願2014-016419
出願年月日：平成26年1月31日
国内外の別：国内

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ

http://cksch.doshisha.ac.jp/prj_mideastern.html

<http://www.cis.doshisha.ac.jp/htsumura/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津村 宏臣 (TSUMURA, Hiroomi)
同志社大学文化情報学部・准教授
研究者番号：40376934

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：